

東京方言の属格主語とゼロ格主語の構造に関して*

佐久間 篤(atsushi.sakuma.linguistics@gmail.com) 南山大学大学院生

KLS45 大会 発表資料

1 はじめに

東京方言では従属節の中で、(1a)のように主語に主格のガが付与されることも、(1b)のように属格のノが付与されることも可能である。この現象は Nominative-Genitive Conversion(NGC; Harada 1971)やガ-の交替(井上 1976)、主格属格交替現象と呼ばれている (以下、主格属格交替現象とする)。

(1) a. boku ga yonda hon

b. boku no yonda hon (Harada 1971 : 26)

東京方言において、主格属格交替現象は、(2)のような関係節や空所なし関係節などの従属節 (以下 NGC 節とする) で起こる。属格主語は(3)のように尊敬語化の対象にも「自分」の先行詞にもなる。Miyagawa(2011)は、属格主語は述部と隣接する必要があることから属格主語は(4)のように TP までしか存在しない NGC 節の中の vP の指定部で生成されるが、TP の指定部には移動しないとした。

(2) a. Kinoo John ga/no katta hon (Hiraiwa 2001 : 73)

b. John ga/no kuru kanousei (Ochi 2001 : 247)

(3) a. [昨日田中先生のお買いになった]本

b. [太郎_iの自分_iの息子の嫌いな]理由

(4) ... [TP [vP Subj=no VP v] T]...

また、(5)のように、特に話し言葉において、主語に明示的に格が現れない場合がある。これは無助詞主語等と呼ばれ(以下ゼロ格主語とし、例文中では \emptyset と表す)様々な研究があるが、加藤(1997)はゼロ格主語は文の焦点にはならないとし、Kuroda(1992, 2007)ではゼロ格主語は Infl と一致するとした。

(5) a. 太郎 \emptyset 帰ったみたいだよ

b. 太郎 \emptyset 本{を \emptyset }買ったらしいよ

本発表では東京方言での属格主語とゼロ格主語を比較し、①「ゼロ格主語は主格主語から主格が省略されたものではなく、またゼロ格主語が NGC 節内で属格主語になるのではない」、②「属格主語は vP の指定部に生成されたのち TP の指定部に移動せずそのまま vP の指定部に留まるが、ゼロ格主語は vP の指定部から TP の指定部に移動する」と主張する。また、属格主語は付加詞であり(6)のように vP の指定部には pro があると主張する。

(6) ... [TP [vP Subj=no [vP pro_i VP v]] T]...

2 属格主語について

2.1 D-licensing と C-licensing

* 本発表を含めて様々な場面で、Doan Le Hoai Anh 氏、王冠亮氏から様々なアドバイスを頂きました。この場で深く感謝を申し上げます。

Miyagawa(2011)によると、生成言語学の枠組みにおいてNGC節内の主語への属格認可の説明としては(7)のようにNGC節外にあるDと一致することで与えられるD-licensingと(8)のようにNGC節内の名詞化したCと一致することで与えられるC-licensingがある。

(7) D-licensing

- a. DS: [DP_{[TP_{[VP kodomotati_i [VP tab] e] ta] raamen D]}}
- b. →SS: [DP_{[TP_{[VP kodomotati_i=no [VP tab] e] ta] raamen D]}}
- c. →LF: [DP kodomotati_i=no [TP_{[VP t_i [VP tab] e] ta] raamen D] (Miyagawa 1993 に基づいて作成)}

(8) C-licensing

- [DP_{[CP [TP_{[VP kodomotati_i [VP tab_[φ] e_[φ] ta_[φ] C_[φ]] raamen D]}}
- AGREE [AMALGAMATE] (Hiraiwa 2001 に基づいて作成)

2.2 Genitive subject in Spec vP

Miyagawa(2013)は、(9a)のようにDが主語に属格を与えるほか、(9b)のようにweak vと依存テンス(dependent tense)が属格を与えるとした。

(9) Genitive Licenser in Japanese

- a. D
- b. weak v, in conjunction with dependent tense (Miyagawa 2013 : 11)

特に、Dが属格を与える場合のNGC節について、Miyagawa(2013)は主格主語が現れる場合については(10a)のような構造、属格主語が現れる場合については(10b)のような構造を仮定した。(10a)ではCが存在するため形式素性がCからTに継承されTから主語に主格が与えられる。しかし、(10b)ではCが存在しないためTに形式素性が存在せずまたDからのライセンスをブロックする要素もvPとDPの間に存在しないため、Dから主語に属格が与えられるとした。

(10) a. Nominative Subject

[DP [CP [TP Subj_i [VP t_i VP] T] C] NP D]

b. Genitive Subject

[DP [TP [VP Subj VP] T] NP D]

2.3 属格主語の非焦点性について

遠藤(2014)は、主格主語は新しい情報を示し、属格主語は古い情報を表すとした。遠藤(2014)は(11a)のように焦点の要素とともに現れる主語に対しては主格が付与されるが、(11b)のように属格は付与されないとした。

(11) a. 中国語さえが話せる人

- b. * 中国語さえの話せる人 (遠藤 2014: 131)

また遠藤(2014)は(12)のように「誰」が前の談話、つまり話し手Aが提示した3人の言語学者の中から1人を求めるような場合、属格が付与されやすくなるとした。しかし、(13)のように「誰」が談話に登場していない新しい情報を指す必要がある場合、主格が付与されるとした。遠藤(2014)は、属格主語は古い情報を示すトピック性を示し、主格主語は新しい情報を示す焦点になるとした。

- (12) A: 今日、本屋に行って、Chomsky と Pesetsky と Rizzi の本を買ってきました。
 B: 誰の?が書いた本を最初に読みますか。 (遠藤 2014, p.131)
- (13) A: 今日の授業で宿題が出たらしい。どんな本でもいいから 1 冊読んで、批判的に検討して、レポートにまとめるのだそうだ。
 B: 誰が/*の書いた本を読みますか。 (遠藤 2014, p.131)

3 ゼロ格主語について

3.1 日本語のゼロ格主語

一般的に、日本語では与格主語構文を除き主語に主格ガが付与される必要があるが、特に会話では(14)のように主格ガが現れなくても文法的な文とされることがある。加藤(1997)はゼロ助詞である場合、その項は脱焦点化を起し、ゼロ格主語は文の焦点にはならないとした。

- (14) a. 【会話をしている、話題を転換した後】「今朝、パソコン{が/の}壊れちゃってさあ」
 b. 【その日初めて会って】「どうした?元気ないね」「風邪{が/の}抜けなくてねえ」
 c. 【ネクタイの曲がっている同僚に向かって】「おい、ネクタイ{が/の}曲がってるぞ」
 (加藤 1997: 27)

また、Kuroda(1992, 2007)は(15)・(16)のように時制要素が含まれない不定節でゼロ格主語は現れないことから、主格主語は Infl とは関係なく現れるがゼロ格主語は Infl との一致を起すとした。

- (15) a. mosi asita paatii ni Masao *(ga)ku-reba
 if tomorrow party to Masao ga come-if
 'if Masao comes to the party tomorrow'
 b. oya *(ga)kane(o)mookete i-nagara
 parent ga money o make be-though
 'even though a parent is making money' (Kuroda 2007)
- (16) a. Hanako wa Masao *(ga)gohan(o)tukuru-to yorokobu
 Hanako wa Masao ga meal o make-if is-pleased
 'if Masao cooks Hanako is pleased'
 b. Hanako wa dareka *(ga)yaki-imo(o)katte kita-node yorokonda
 Hanako wa someone ga baked-yam o buy come-since was-pleased
 'Hanako was pleased since Masao bought and brought baked yams..' (Kuroda 2007)

3.2. 主格主語とゼロ格主語の違いについて

青柳(1999)は主格主語からの数量詞遊離は、(17)のような中立叙述を主語に取る場合は可能であるが(18)のような総記を主語に取る場合は不可能であるとした。しかし、ゼロ格主語の場合、数量詞遊離が起らない場合(19)のように中立叙述を取る場合でも(20)のように総記を主語に取る場合でも容認度が下がる。ゼロ格主語が単純に主格のガが省略されているのであれば(17)と(19)、(18)と(20)のような容認度の違いは発生することはない。よって、ゼロ格主語は単に主格が省略されていないと主張する。

- (17) a. 5人の学生が来たね
 b. 学生が5人来たね
- (18) a. 5人の学生が勤勉だね
 b. *学生が5人勤勉だね
- (19) a. ?5人の学生_o来たね
 b. 学生_o5人来たね
- (20) a. ?5人の学生_o勤勉だね
 b. ?学生_o5人勤勉だね

4 ゼロ格主語と属格主語の位置について

4.1. ゼロ格主語と属格主語の統語的な違いについて

ゼロ格主語も属格主語も、主格主語とは異なり焦点にならないことから、ゼロ格主語も属格主語も同じ統語位置を占めると主張できる。しかし、本発表ではゼロ格主語と属格主語は統語的に別の位置に現れると本発表では主張する。まず、Kishimoto(2012)は否定対極表現(NPI)と尊敬語を使い主格主語はvPの指定部に生成されTPの指定部に移動するとした。「誰」は「も」に束縛されている場合NPIと解釈できる。(21a)のように、「誰」に主格が付与され動詞の後に「も」が現れた場合、「誰」はNPIと解釈されない。Kishimoto(2012)は「も」はvPよりも高い位置に現れるが主格主語が(21b)のように「も」よりも高いTPの指定部に移動すると「も」に束縛されないため、NPIが起こらないとした。

(21) a. *Kon-kai-wa dare-ga kihū-o yobikake-mo si-nakat-ta.

b. * [TP SU_{-NOM} [[vP SU_{-NOM} [VP V] V-v-mo] si-nakat] ta] (Kishimoto 2012 : 15-16)

ここで、(22)のように主語「誰」がゼロ格であり、動詞の後に「も」が現れた場合、主格主語を用いた(21b)と同様にNPIとして解釈されることはない。よってゼロ格主語は、主格主語と同様にTPの指定部に移動していると言える。

(22) a. *誰_o寄付を呼びかけもしなかった。

b. *昨日誰_o来もしなかった

また、佐久間(2019)では(23)のようにNGC節内の主語「誰」に属格が付与されている場合はNGC節の主要部の動詞の後に「も」が現れた場合であってもNPIとして解釈されるとし、属格主語はvPの指定部に留まるとした。

(23) a. 太郎は[昨日誰{*が/の}買ひもしなかった本]を知っている。

b. [昨日誰{*が/の}来もしなかった理由]が未だに分からない。 (佐久間 2019: 5)

次に、Kishimoto(2012)はアスペクト動詞の「いる」を用い、主語がvPの指定部からTPの指定部に移動する場合は本動詞もアスペクト動詞も尊敬語化できるが、vPに留まる場合は本動詞のみ尊敬語化できるとした。尊敬語化は本動詞かアスペクト動詞のどちらかで起こり、主格主語の場合(24a)のように本動詞もアスペクト動詞も尊敬語化が可能である。Kishimoto(2012)は、(24b)のような構造を仮定し本動詞が尊敬語化する場合はvPの指定部で一致する必要があるが、アスペクト動詞が尊敬語化する場合はvPaspで一致する必要があるとし、主格主語は一番高い位置にあるTPの指定部に移動するためvPでもvPaspでも一致できるとした。

(24) a. Sensei-ga Eri-ni sono-koto-o {o-hanasi-ni-nat-te i-ru/hanasi-te o-ide-ni-nar-u}.

b. [TP [vPasp [VP ... [TP ... [vP [VP V] V-v] te] V] V-vasp] T] (Kishimoto 2012 : 21-23)

ここで、(25)のようにゼロ格主語の場合、本動詞もアスペクト動詞も尊敬語化できる。よってゼロ格主語は、主格主語と同様に TP の指定部に移動していると言える。

(25) a. 昨日田中社長のハンバーグを{お食べになっていた/食べておいでになった}らしいよ

b. 昨日田中社長の{お笑いになっていた/笑っておいでになった}らしいよ

また、佐久間(2019)では属格主語の場合には(26)のように本動詞が尊敬語化できるが、アスペクト動詞は尊敬語化できないとした。

(26) a. [昨日田中社長の{お食べになっていた/*食べておいでになった}料理]は花子が作った。

b. [昨日山田先生の{お買いになっていた/*買っておいでになった}理由]をその場にいた花子は分からなかった。 (佐久間 2019: 5)

以上のことからゼロ格主語は TP の指定部に移動するが属格主語は vP の指定部に留まると言えるがゼロ格主語と属格主語がどちらも焦点の解釈が出来ない理由を説明する。Rizzi(1997)は CP は(27)のような階層構造に分割できるとし、焦点要素は FocP の指定部に現れるとした。

(27) [ForceP [TopP [FocP [TopP [FinP TP]Fin]Top]Foc]Top]Force] (Rizzi 1997:297 を元に作成)

属格主語は vP の指定部に留まるために FocP まで移動できず、焦点の解釈が現れない。また、ゼロ格主語は vP よりも高い位置に移動するが、(28)のように TP の指定部に移動しそれよりも高い位置に移動しないとすると主張する。その場合、ゼロ格主語は FocP まで移動せず焦点の解釈が現れない。

(28) ... [TP Subj= φ_i [vP t_i VP v] T]...

4.2 属格主語とラベリングの問題

属格主語が DP であるとする(29)のように DP と vP が併合した {XP, YP} 構造が現れる。Chomsky(2013,2015)が正しいとすると、{XP, YP} 構造が現れた場合、XP もしくは YP がさらに高い位置で併合するもしくは XP と YP の共通素性を探索することでラベル付けが起こる。しかし、属格主語は vP もさらに高い位置で併合させず、また属格主語と vP の間に共通素性があることは難しい。よって属格主語が DP であるとラベル付けの時に問題が発生する。佐久間(2019)では(30)のようにノが後置詞であり属格主語が PP であるとし、PP であればラベル付けの問題は発生しないとした。しかし、カラヤデのような他の後置詞と比べ、ノ自体の意味が不明確であるという問題が発生する。

(29) ...[_? [DP 太郎=no] [vP V v]]

(30) ...[vP [PP 太郎 [p no]] [vP V v]] (佐久間 2019: 5)

Jelinek(1984)はワルピリ語や日本語の分析を行い、いわゆる階層的な言語では(31a)のようにそれぞれの項は動詞に統率されているが、ワルピリ語や日本語のような語順が比較的自由であり pro が現れるいわゆる非階層的な言語では(31b)のように項は動詞には統率されず付加すると主張した。また、Jelinek(1984)は主格でない主語は付加詞であるとした。

(31) Configurationality Parameter(Extended):

a. In a configurational language, object nominals are properly governed by the verb.

- b. In a W-type non-configurational language, nominals are not verbal arguments, but are optional adjuncts to the clitic pronouns that serve as verbal arguments. (Jelinek 1984: 73)

Jelinek(1984)の主張を採用し、属格主語は付加詞であり(6)のように主語が生成する位置には *pro* があると主張する。この場合、ラベルの問題も解決する。

(6) ... [TP [_{vP} Subj_i=no [_{vP} *pro*_i VP v]] T]...

5 まとめ

本発表では、東京方言での属格主語とゼロ格主語を比較し、ゼロ格主語は主格主語から主格が省略されたものではなく、またゼロ格主語が NGC 節内で属格主語になるのではないとし、属格主語は(6)のように *vP* の付加位置に生成されたのち TP の指定部に移動せずそのまま *vP* の指定部に留まるが、ゼロ格主語は(28)のように *vP* の指定部から TP の指定部に移動すると主張した。また、属格主語は付加詞であり(6)のように *vP* の指定部には *pro* があると主張した。今後の課題としては、ゼロ格主語が TP よりも高い位置に移動していない証拠と属格主語が付加詞であるという証拠を示す必要があると考えている。

(6) ... [TP [_{vP} Subj_i=no [_{vP} *pro*_i VP v]] T]...

(28) ... [TP Subj_i= \emptyset _i [_{vP} *t*_i VP v]] T]...

参考文献

- 青柳宏(1999) 「いわゆる「総記」のガに関する覚え書き」『アカデミア 文学・語学編』67: 769-788. 名古屋: 南山大学./Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130, 33-49. / Chomsky, Noam. 2015. Problems of Projection: Extension. Elisa D. Domenico, Comelia Hamann & Simona Matteini(eds.). *Structures, Strategies and Beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*. 3-16. John Benjamins. / Harada, Shin-Ichi. 1971. Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. *Gengo Kenkyu* 60, 25-38. / 遠藤喜雄(2014). 『日本語カーグラフィック序説』東京: ひつじ書房./Hiraiwa Ken. 2001. On nominative-genitive conversion. Guerzoni Elena & Matushansky Ora(eds.). *MITWPL 39: A Few from Building E39: Papers in Syntax, Semantics and their Interface*. 66-125. MIT Working Papers in Linguistics. / 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語』大修館./Kishimoto, Hideki. 2012. Subject honorification and the position of subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 21(1), 1-41. / 加藤重広(1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27: 19-82.富山: 富山大学. / Kuroda, Shige-Yuki.(1992)Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese. In: Kuroda Shige-Yuki(ed.), *Japanese Syntax and Semantics*, 315-357. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers. / Kuroda, Shige-Yuki.(2007)On the syntax of Old Japanese. In: Frellesvig Bjarke, Shibatani Masayoshi & Charles John(eds.), *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, 263-318. Tokyo: Kuroshio. /Jelinek, Eloise.(1984)Empty Categories, Case and Configurationality. *Natural Language and Linguistic Theory* 2, 39-76. /Miyagawa, Shigeru. 1993. Case-checking and Minimal Link Condition. Phillips Colin(ed.)*Papers on Case and agreement II MITWPL 19*. 213-254. MIT Working Papers in Linguistics. / Miyagawa, Shigeru. 2011. Genitive subjects in Altaic and specification of phase. *Lingua* 121, 1265-1282. / Miyagawa, Shigeru. 2013. Strong Uniformity and Ga/No Conversion. *English Linguistics* 30, 1-24. / Ochi, Masao. 2001. Move F and Ga/No Conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247-286. / Rizzi, Luigi(1997)The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman(ed.), *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281-331, Dordrecht: Kluwer. / 佐久間篤(2019) 「東京方言における属格主語に関して: 属格主語との比較から」 関西言語学会第44回大会発表資料.